

過去から現代へ、現代から未来へ。
今、世界のミュージアムが大きく変わろうとしている。
一方的な伝授の場から、ともに考え語らう場へ。
スウェーデンとタイにあるふたつの博物館から
新しいミュージアムのあり方を考えてみよう。

川口 幸也 (かわぐち ゆきや)
文化資源研究センター

ミュージアムの語源

ミュージアムの素性が話題になるとき、しばしば引き合いに出される話だが、ミュージアム(museum)という言葉のおおもとにはギリシヤ語のムセイオン(Museum)であり、その意味するところは「ムネズ(Muse)」、つまり学問と芸術をつかさどる女神たちのおわします神殿であるという。
では、この語源はどうだろうか。フ

けれども、もしかしたら、museumやMuseumという言葉は、muserという古語の記憶とどこかでたがいに響きあっているのではないかと。正直にいうと、少し前から、世界各地のさまざまなミュージアムを訪ね歩くうちに、私の中でそのような思いが少しずつ芽生え始めている。

ともに考え語らう場

今年初め、私は、スウェーデン第二の都市イエテボリにある世界文化博物館を訪ねる機会を得た。同博物館は、二一世紀の新しいミュージアム像を提示する博物館として世界の耳目を集めている博物館のひとつである。

二〇〇四年二月にオープンした同館では、あらゆる博物館像を模索した結果、従来の博物館がともすれば過去ばかり目を向けて、必ずしも同時代の世界と向き合っていないことが踏まえて、既存の学問領域にとらわれずに今日的問題を探り上げるという方針を掲げた。このため、移民や麻薬、エイズ、犯罪、失業、宗教間の軋轢といった、これまでの博物館では傍流の扱いに留まっていた「カレント・イシュー」(現代の問題)が、ここでは展示などを通して正面きって扱われることになったのである。

いまでもなく、これらの問題には明確な答えはない。したがって、そうした方針の基本にあるのは、一言でい



通称「スペイン階段」



スウェーデン/
イエテボリの
世界文化博物館

ランス語でミュージアムに当たる言葉は museum だが、同じフランス語には musee という古語(動詞)があつて、こちらは「無為に時間を過ごす」という意味になる。もちろん、辞書によれば museum の語源もギリシヤ語のムセイオンに行きつくとあり、muser という古語との関係を窺わせる記述は見当たらない。つまり言葉の系列としては、muser の方は amuser (楽しむ) を経て amusement (娯楽) へとつながっている。

かつてのミュージアムのように、来館者に対して一方的に何かを教えようとするのではなく、世界が共有する出口のない問題を探り上げて、ともに考えようという姿勢である。

たまさか私が訪ねたときは、「地平線—アフリカの声」というアフリカの現在に焦点を合わせた展示と、南米オリノコ川流域に住む人びとの文化を紹介する展示、それにグローバルゼーションの一面としてのエイズをテーマとする展示がおこなわれていたが、いずれも、内容の切り口と展示手法の両面において意欲的な取り組みであった。

同館はまた、隣接するイエテボリ大学に、展示空間を実践的な授業の場として積極的に開放し、一方で独自に大学院修士課程にあたる国際博物館学コースを設けるなど、教育面でも前向きな施策を打ち出している。

しかしながら、今回、私がもともと注目したのは、そんな展示活動や運営面での新しい試みもさることながら、場としての世界文化博物館が、多くの来館者に実際にどのように利用されているのか、ということであった。

担当者から説明を受けた翌日の昼過ぎ、普通の来館者の視線で確かめてみたいと思ひ、あらためて一般の入り口から同館に足を踏み入れてみた。すると、入り口のフロアからいきなり幅二〇メートル以上もある木の階段が、二階へ向かってまっすく伸びていて、その壁の目に飛び込んできた。天井と奥の壁



世界文化博物館(イエテボリ)の全景
(2点とも撮影は林 勲男)

パイユートのゆりかご

特別展「みんなくキッズワールド」出展作品
ゆりかご(標本番号H83428、高さ/25.7cm 幅/36.3cm 奥行/69.5cm)

池谷 和信 (いけや かずのぶ)

民族社会研究部

これは、アメリカ西部の内陸部に暮らすパイユートの子守歌で、「ゆりかごのうた」とよばれる。パイユートは、大盆地の砂漠地帯で狩猟や採集で生計をたて、移動生活を送ってきたインディアンである。彼らが馬を利用してきつくなったのは一六世紀にスペイン人がやってきてからである。一九世紀前半には、毛皮交易にきたヨーロッパ人から、ガラスヒースを入手した。一九世紀後半には数多くの

くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん
くうー あ くうー 小さなハトさん

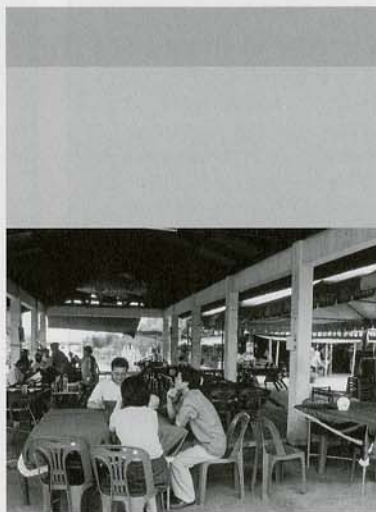
坊の頭をおおうフードには、細い木で作ったカパーがつけられ、体を皮製のひもでしばるようになってくる。しかも、カパーにジグザ



軍隊駐屯地などがつくられ、急激な生活変化を経験した。彼らのゆりかごは、ユニークである。赤ん

グに入った赤色の刺繍は女の子用のゆりかごを示し、それが男の子用のゆりかごである。さらに、装飾にはみず色を基調とするビーズ細工がほどこされていて芸術的でもある。一九世紀のゆりかごには、白色を中心としたガラスビーズで板の面をうめつくしたこともあるが、現代ではプラスチック製のビーズを線状に並べて簡略化している。かつてパイユートの社会に馬が導入されると、移動の方法が大きく変わった。馬の脇腹に二本の丸太がくりつけられ、そこに荷物のほかにも赤ん坊を入れたゆりかごをしばるのである。一九世紀の終わりに移動生活が終わると、子どもを運搬するゆりかごは使われなくなつた。しかし、一九八〇年頃になると、かつてのパイユートの暮らしを復元するためにゆりかごが作られるようになった。

豊かな役割を担っているのだ。スウェーデンの世界文化博物館とタイの小さな漁村の地域博物館。一見なんの脈絡もなく、見た目もまったく異なるふたつの博物館は、しかしある一点で奇妙な一致を示しているように思えた。それは、ただ飲んだり食べたり、談笑したりしている以外に何もせず、そこにいるだけの人をもやさしく迎え入れて居場所を提供してくれる、少なくともそのように見える、という点である。仮にそうだとしたら、museumの語源の一部がmusei(無為に時間を過ごす)であった



としてもさほどおかしくはないことになる。いずれにせよ、一方的に知を伝授しようとした近代のミュージアム像の限界を超えようとして、模索し続ける西洋の最先端のミュージアムがたどり着いた地点と、ミュージアムという近代的な装いをこらしながらも、地元歴史と文化に深く根ざしているタイの地域博物館が佇む場所は、意外なことにもそれほど離れてはいないのかもしれない。新しい時代のミュージアムの可能性を、ほんの少しだけ垣間見たような気がした。

ふたつの博物館の共通点

帰りがけに、私はつい今しがた目にしたスペイン階段の光景を反芻しながら、昨年夏にタイを訪れた際に、首都バ



タイ/イサンの地域博物館



ンコックから車で三時間ほど走ったところにある小さな海辺の漁村で見た地域博物館のことを思い起こしていた。イサンという名の村の一角には小学校の敷地ほどの空き地があつて、そこに木造二階建ての寺院風の博物館が建っている。教室ふたつ分ほどの展示室には、ずつと昔、難破した中国船の生き残りがこの村を開いたという言い伝えを裏付ける遺跡の写真や、そこから掘り出された中国製陶磁器の破片、村を取り巻く地勢の特徴を示す写真やグラフィック、それに仏塔や仏像の石彫レリーフなどが、整然とガラスケースに収められて展示されている。ただ、欧米や日本の博物館とひとつだけ違うのは、展示室の奥に仏像が置かれていて、地元の人びとが時折りそこにお参りに来るという点である。村の博物館は、地域の人にとってはお寺の代役も務めているのである。外に出ると、博物館の前の広場には田舎風の食堂があつて、地元の人びとの幸を使つたおいしいタイ料理を出してくれる。観光客や村人たちが、家族やグループでやってきてはそこで食事とおしゃべりを楽しんでいくのだという。広場ではまた、時節が来ると祭りも催され、その折には村じゅうの人びとが集ってくるらしい。タイの地域博物館は、単に知や情報を伝え広める場であるだけでなく、人びとが自分を確かめ、たがいに語り、ふれあうための共通の場として多彩で